

林原美術館蔵『射山百首和謠』翻刻

―守覚・慈円・静空―

北原 沙友里

解説

岡山市にある林原美術館所蔵『射山百首和謠』は、後鳥羽院下命の『正治初度百首』の異本である。『正治初度百首』は、二三名の詠者がそれぞれ、春二〇首・夏一五首・秋二〇首・冬一五首・恋一〇首・羈旅五首・山家五首・鳥五首・祝五首の計百首を詠んだもので、『新古今和歌集』の撰集資料となるなど新古今時代の和歌を論じる上で重要な作品である。

本資料は、「射山」という名称や、後鳥羽院から各歌人への下命時期を示す賜題目録を持つことなどから、従来知られていた『正治初度百首』の伝本とは別系統の本であることが指摘されており、今後の正治百首研究の重要な資料となることは明らかである⁽¹⁾。

今回、期せずして原豊二氏、山崎桂子氏の兩名と本資料の共同研究を行う機会を得た。その研究の端緒として、本百首の⑤⑦に置かれている僧体歌人三名、守覚・慈円・静空の翻刻を行った⁽²⁾。

本資料の基本的な事柄については、原氏がすでに「池田光政ほか筆『射山百首和謠』（林原美術館蔵）について」でまとめられているため、詳しくはそちらを参照されたい⁽³⁾。本稿では以下に書誌情報だけ引用し、資料の内容について簡単に触れておく。

外題 ナシ

内題 「射山百首和謠（正治二年）」

池田光政ほか筆

整理番号 504143

表紙 藍色、菱紋・花紋（貼紙「準備 雑甲第七九號」）

見返し 装飾、原装

料紙 鳥の子・薄様混ざり、色紙多い

数量 一冊

寸法 縦一八・六センチメートル

横一六・八センチメートル（本文より）

全一七丁（遊紙 前一丁、後五丁）

本文一〇行 和歌一首二行

本資料は列帖装の写本で、写本としては豪華な作りとなっている。

書写者は岡山藩主である池田光政（一六〇九〜一六八二）とその娘である奈阿子、息子である綱政の三人と見られ、分担して書写を行ったようである。本稿で翻刻した三名については、守覚・慈円を光政が、静空を奈阿子が書写している。

冒頭でも述べた通り、本資料は『正治初度百首』の異本の一つであるわけだが、二三名の百首をすべて収めているわけではなく、十名の百首を載せる。その十名とは掲載順に、前齋院（式子内親王）、二條院讀岐、小侍従、宜秋門院丹後、御室（守覚法親王）、前僧正（慈円）、左府入道（静空）、五条三位入道（俊成）、師光入道（生蓮）、定長入道（寂蓮）、である⁽⁴⁾。

また、本資料の特記事項としては巻末に附載されている賜題目録と奥書がある。それぞれについては前述の原氏の論稿に詳しいが、簡略に述べると、賜題目録は、「賜題次第」として後鳥羽院から各詠者への下命時期が記されており、これらはおおよそ山崎氏の説と一致する⁽⁵⁾。奥書は、いわゆる「本奥書」を二つ持ち、この奥書から本資料が、頓阿作成本の書写本であることがわかる。この奥書についても

様々に検討すべきことがあるが、本稿の目的ではないためここでは取り上げない。

書陵部本との主な異同

本資料の本文が現行諸本と異なっている点が多いことは、すでに原氏が式子内親王歌を翻刻して指摘しておられるが、今回翻刻した三名の百首についても同様である。書陵部本と比較して気づいたことを以下挙げていく。

まず、守覚法親王歌についてである。特筆すべきは山家五首と羈旅歌五首が前後していることだろう。書陵部本では羈旅、山家の順になっているところが、本資料では山家、羈旅となっている。また雑歌については、他に鳥題五首の異同が気にかかる。例えば、091の歌は、
もろ人をはくゝむちかひあらはれて我こそ峯の名にはおひぬれ

〔射山百首和詞〕

諸人をはくゝむちかひあらはれてわしこそ峰の名にはおひぬれ

(書陵部本)

と、四句目に異同が見られるが、鳥題の歌であることを踏まえれば適当なのは書陵部本の「わし」であろう。

次に慈円歌についてである。すでに原氏が指摘しておられるが、慈円歌はまず、秋歌が十九首しかない。脱落箇所は048、049の間であり、書陵部本で言えば(652)の歌、

白菊は秋の雪ともみゆるかなうつるふ色を冬の花にて

であり、書写時の目移りだろうが、本資料ではこの歌の下句が048の下句に混在してしまっている。この抜けがあったためか、秋歌と冬歌が続けて書かれており、冬歌だけ部立名がない。他の歌にも目を向けてみると、015の歌も、結句が「をはずせのやま」となっているが、これは二首前の013の歌の結句がやはり「をはずせの山」であり、ここも目移りがあったかと推測される⁶⁾。

一方で、秋の043の歌などは、書陵部本が「雪」であるところが「き

り」となっており、本資料の方が良いのではないかと思われる歌もある。

最後に静空歌について述べる。静空の歌では、まず、冬歌に歌順が異なる箇所があることが指摘できる。冬の一二番目から一四番目の歌がそれであり、本資料では067(1872)・068(1870)・069(1871)の順になっている。この歌順については、他の伝本とも対照して検討する必要があるだろう。また、068、069の二首については異同も著しい。どちらも上句に大きな異同が見られ、歌意についても考察の余地があるだろう。

この二首に限らず、静空歌の異同は、全体的に大きな異同が目立つ印象を受ける。例えば、秋の047は、初句が「はつしくれ」〔射山百首和詞〕、「はれくもる」(書陵部本)とまったく異なっている。他にも羈旅084の、「ふゝきする」〔雪〕〔射山百首和詞〕、「たびね」〔風〕(書陵部本)等が挙げられる。

このように、歌意に関わるであろう大きな異同が随所に見られ、他の諸本との比較並びに本文の検討が、今後の課題の一つである。

翻刻

〔凡例〕

- ・ 翻刻の体裁は原氏のものに倣い、具体的には以下の通りである。
- ・ 本文では一首二行のものを一行としている。
- ・ 欠字は□で示した。
- ・ 対校には『新編国歌大観』の底本となっている宮内庁書陵部蔵本を用い、異同箇所には私に傍線を引いたが、字体や仮名遣いの違いは異同にとつていない。
- ・ 校異は各和歌の後ろにつけ、先に『射山百首和詞』、後に書陵部本を示した。
- ・ それぞれの百首には便宜上001〜100までの番号を頭に振り、歌末尾に括弧して対応する『新編国歌大観』の番号を付した。

○守覚法親王

御室

春廿首

001 としくれしなごりの雪やおしからんあとたにつけてはるはきにけり(304)

002 いはまより春をもしらてゆく水のなみにたよふうすこほりかな(305)
校異 いはま いしま

003 校異 もしらて もらして
かすみしくひかたにあさるなにはめはこころあてにやいそなつむらん(306)

004 春のゝに霞をわけて入ぬればあさなくきしのはをとおそきく(307)
校異 入ぬれば 入ぬとは

005 校異 おそきく にそしる
うくひすのこゑにひかりやそひぬらん月にうたひて谷をいづなり

006 005 かをとむるたよりにきなけ鶯のすきうかるへむめのたち枝を(309)
校異 へ へき

007 校異 たち枝を たち枝そ
つくくくと春雨そくのきはよりしのふつたひにおつる玉水(310)

008 007 わするなよ秋こしかりの今はとてかへる山ちをおもひたつとも(311)
校異 山ちを 山路に

010 009 春の色もさかすはいかゝしりそめむむめよりさきに花なかりけり(312)
なかめてもいかにかたへん梅かえのはなに月みるはるのあけほの(313)
校異 かたへん かたらむ

011 校異 月みる 月もる
木のもとに花まぢかかねてなかわれはおもかけよりそさきはしめける(314)

012 さくらさくみねたちはなれ行雲はせめても花におもひわけとや(315)
さらぬくにおしきなごりをいかに又花よりもろき雪とみゆるらん(316)
校異 さらぬくに さらぬたに

014 校異 みゆるらん みゆらん
いはかうへにましはをしきてあけにけりよしのゝおくの花のしたふし(317)

015 校異 いはかうへ いはかね
校異 をしきて おりしき

015 けふもまたあかぬなごりにくれはてぬあはれたちうきはなのかけかな(318)
校異 なごり なかめ

016 家つとに花をつゝみてかへるさはにほひに袖にもれてちりける(319)
校異 にほひに にほいそ

017 ちりまかふ花のふゝきにかきくれてそらまてかほるしかの山こえ(320)
校異 かほる にほふ

018 今そしるたこの浦ふちさきにけりをとせて浪はよするなみかは(321)
校異 なみかは ものかな

019 いはしろのはま松かえにふちの花これさへたれかむすひかけゝん(322)
校異 松かえに 松かえの

020 われもおしむみちになこそその関もあるをおもひもしらすかへる春かな(323)
夏十五

021 けさもなををあを葉かくれにちりやらて春のなごりそはなにみえける(324)
校異 みえける なりける

022 五月やみ卯の花かけのしらむよりおりたかへたる雪のあけほの(325)
五月雨によとの川をさふなてしてわけしまこもは波のした草(326)
さてもなをいつかはるへきひかすのみふるのゝのさとの五月雨の空(327)
校異 さとの さはの

023 024 おもふこといはてのもりの郭公つゝには聲もいろにいてにけり(328)
ほとゝきす卯花山のあかすして空にしられぬ月になくなり(329)
校異 さとの さはの

025 026

026

027 まちくらすしるしはこれかほとゝきす雲のはたてにひとこゑそす
 る (330)
 028 待よたにつゆまところまでならひにきかたらひあかせ山ほとゝきす (331)
 029 校異 あかせ あかす
 ほとゝきすさそへとうれしたちはなにおりえてきぬるこゑにほふ
 なり (332)
 校異 うれし うゑし
 校異 きぬる きなく
 030 いはふれてこれは玉ちる夏川につきこそほれなみやをとせぬ (333)
 校異 これ みな
 031 いつのまに峯うつりして過ぬらん一村雨のゆふたちのそら (334)
 校異 そら くも
 032 しはつ山かせふきすきむならのはにたえくのこるひくらしのこ
 ゑ (335)
 校異 のこる のこる
 033 あけ行はもゆるほたるもかけきえてけふりを水にうつすなりけり (336)
 校異 うつつ のこす
 034 おくまでもいさわけいらん外山たにはかくれすし松のしたみち (337)
 035 てにむすふあての玉水そこすみてみえけるものを秋のおもかけ (338)
 秋二十首
 036 夕されの秋のあはれをさきたてゝあさかせわたるをのゝしのはら (339)
 037 おほかたの露はかりにやぬれぬらんこよひはかわく天のは衣 (340)
 038 これのみとおしむもくるし我やとの一むらはきにあきかせをふく (341)
 039 心をはいるとこゑとにわけとめつはきにもかくや宮木のゝはら (342)
 校異 もかくや 鹿なく
 040 ちくさまで花にうつろふうはの露ちるにそもとの色はみえける (343)
 校異 うはの露 上露は
 041 木からしにあさちかたよるけ色よりむしのねきかんくれそまた
 る (344)

042 たえくのうす雲のこるかた山のすそのゝくれにうつらなくなり (345)
 043 こす多ふくあらしのをとをしくれてした紅葉する松もありけり (346)
 044 千里までさえ行月にこととはんあとなき雪はおのかひかりか (347)
 045 おもかけにすまもあかしもさそひきてこゝろそ月にうらつたひす
 る (348)
 校異 する ける
 046 またもこむ紅葉の山の木のまより色に秋あるつきもいてけり (349)
 047 よはにさへうらのしほかひひろへとやくもりもなみに月はすむら
 ん (350)
 048 ふけ行はしかに一よのやとかりて月をかたしくをのゝ草ふし (351)
 049 すむ月にぬるゝたもとをわれゆへに涙とみてやかかけやとすらん (352)
 校異 われゆへに われゆへの
 050 なをさりのあるかなきかのかけみえてみ草にくもる山の井のつき (353)
 校異 なをさりの なほさりに
 051 かくとたにまたよにしらしおく山のいはかけまゆみ色つきにけり (354)
 校異 よにしらし よもしらし
 052 あはちふねきりかくれ行さほのうたのこゑはかりこそせとわたり
 けれ (355)
 校異 かくれ行 かくれこゑ
 053 をとしるししかのかよひちこれなれやきりのあなたにこの葉ふむ
 也 (356)
 054 草かくれ庭になれつるしかのねに人めまれなるほとをしるかな (357)
 校異 なれつる なれくる
 055 秋はいぬおりしも空に月はなしなにのなこりをいかになかめむ (358)
 冬十五首
 056 かれくの菊にや冬をしりにけんした行水とうすこほりつゝ (359)
 校異 とうすこほりつゝ もうほこほりけり
 057 けさみれはたつた川原の河をろしきそふ紅葉をなみそおりける (360)
 校異 紅葉を もみちの

- 058 ときのまにくもるかとかそなかめつれおもひもあへぬはつしくれ
かな (361)
- 059 かくれぬとみれはたえまにかけもりて月もしくるゝむら雲のそら (362)
- 060 うらかれて後さへ色そかはりぬるはつしもしろし谷のかけ草 (363)
- 061 たちぬるゝ山のしつくもおとたえてまきのしたはにたるひしにけ
り (364)
- 062 さえこほる木すゑはかりや冬ならんゆきに春めくし賀の花その (365)
- 校異 こほる わたる
- 063 ふゆこもるたにのとたゝく音さえて雪ふきおろす峯のまつ風 (366)
- なには人あし火たくやに降雪のうつみのこすは煙なりけり (367)
- 065 いはねよりしかのみつたふ峯のゆきはあとありとてもかよふへき
かは (368)
- 066 きさかたやいそやにつもる雪みれはなみもしたにそあまは住ける (369)
- 校異 なみも 浪の
- 067 たれゆへのいけのつらゝのとこならんみなるゝ鳥はよかれしにけ
り (370)
- 068 嵐ふくとしまかさきの入しほに友なし千鳥月になくなり (371)
- 069 むかしおもふさよのねさめのとこさへてなみたにこほる袖のうえ
かな (372)
- 070 過ぬるかとしのかよひちいかならんひま行こまもあとたにもなし (373)
- 校異 こまも こまは
- 恋十首
- 071 いはゝしの中のとたえはさもあらはきかはやよるの契はかりを (374)
- 校異 とたえ たえま
- 072 あはゝやなよそなからのみみよしのゝみくまかすけのかりねなり
とも (375)
- 073 としへてはつらき心やかはるとてゆくすゑのみそ今はまたるゝ (376)
- 074 恋わひぬつれなき人にあふみちのしるへにかよへしのゝをふゝき (377)
- 075 おもひねのさよの枕にあひみれはうつゝにまさるゆめのかよひち (378)
- 076 たかふなよちきりおきてし言葉にかゝれるいのちたえもこそすれ (379)
- 校異 かゝれるいのち かかるいのちの
- 077 なほざりにそらたのめしてこぬ人をまつこそ恋のかきりなりけれ (380)
- 校異 なりけれ なりける
- 078 こひしなはまたもこの世にめぐりきてふたゝひ君をよそにたにみ
ん (381)
- 079 なに事もふり行身にはわすれ草きみはかりこそ露もかはらね (382)
- 校異 きみ 恋
- 080 かよひこしの中のし水かきたえてくまぬにしもそ袖はぬれける (383)
- 山家
- 081 のかれこし山ちはかりになかむれはいとふ宮こはふもとなりけり (389)
- をりゝの哀しるへきやまさとにこゝろなき身そすみうかりける (390)
- 082 たにかけのしはの煙にしられけりおもひもかけぬいゑありとは (391)
- 083 山ふかくなるゝ心にかにまた雲よりおくにやともとむらん (392)
- 校異 心に 心の
- 084 いはそゝくこゑよりやかておとろけはゆめあらひやむ谷のした水 (393)
- 羈旅
- 085 あともなくやえたつ雲にみちわけてなみたしくるゝさよの中山 (384)
- 086 わひつゝもかくていくよか過ぬらんかりねならはぬいなしきのさ
と (385)
- 087 をかやくひなのあらのゝつゆけきは心までをはしほればつへき (386)
- 校異 ひなの ひらの
- 088 明かたにさりともいまはなりぬらんやとるみやまね鳥のねもせず (387)
- 校異 みやまね み山は
- 089 いそ枕ぬるといとはししほかせに月かけよするまつか浦なみ (388)
- 校異 ぬるといとはし ぬるにいとひし
- 090 校異 浦なみ うらしま
- 091 鳥
もろ人をはくゝむちかひあらはれて我こそ峯の名にはおひぬれ (394)

092 校異 我 わし
たのしみやこからのいけにふかからん玉もにあらむかものむら鳥(395)

校異 こから たから

校異 あらむかもの あそふかりの

093 いさきよきはちすのりをうつしてそとにもすりの水をそへける(396)

校異 とともに はとも

校異 とともに はとも

094 なかきよの夢さめよとやにはつ鳥あけ行そらを人につくらむ(397)

校異 そら 空

095 あひかたき三の宝のみなをしも聲をおします鳥のなくらん(398)

校異 聲を こども

祝

096 月かけにひらくるはしのくさよりやめくみの露はよもにちるらん(399)

校異 くさ はな

097 さくれ石のいはとしならん行末をはこやの山そかねてみえける(400)

校異 いはとし いはほと

校異 みえける みせける

098 あまくたる神はきみをそてらすらん玉くしのはのときはかきはに(401)

校異 あまくたる あまくたり

099 ふた千代をかさねてゆつれ君をいのる小松の里のつるのけ衣(402)

100 雲とのみいなはみえてたかやともうるをひわたる天の下かな(403)

○慈円

前大僧正慈円

春廿首

001 ひとせはきのふのそらくれはてけふめつらしき春の明ほの(604)

002 あさみとりはるのこえ行あふさかをかすみのせきと人やみるらん(605)

003 わか君のちよのためしを人とはねのひの松をひきてこたえん(606)

004 霞行春のしほやのけふりかなふたみの浦のあけほの空(607)

005 みやまへの雪けの雲をわけてかすみにつるうくひすの聲(608)

校異 わけいて、分はてて

006 庭のゆききえ行ひまをたとりつゝかきねの草のはるもとめけり(609)

007 山さとのむめのたち枝や霞かゝるすまひをとふ人そなき(610)

校異 たち枝や たちえの

校異 とふ人そ とふ人の

008 ものことに身にしむ春のけしきかなその驚はなになくなり(611)

009 あをやきはやまひの空にいとそめて花ゆへにくる人をまちける(612)

010 峯は雲ふもとは霞久方の雲ぬにみゆるあまのかく山(613)

011 よしの山かすみもふかくわけいれは花のおくある春の明ほの(614)

012 いかにいひいかにおもはんみよしのはなにかすみの明ほのそら(615)

校異 はなにかすみの 花はかすみに

013 入逢のをとはかすみにうつもれて雲にそかほれをはつせの山(616)

校異 雲にそかほれ 花こそなけれ

014 春の山もりくる月にかせすきてなみたつゆけき花のしたふし(617)

校異 春の山 春の山に

015 はなさかりくもおほろに霞よは月さへふかきをはつせのやま(618)

校異 をはつせのやま みよしの山

016 よしの山ふもとに花の雪そちるくもの木すゑにかせやふくらん(619)

017 なかめつるよもの木すゑのむら霞ひとへになれははるさめそふる(620)

校異 ひとへになれは ひとつになりぬ

018 校異 はるさめそふる 春雨の雲

よはにかへるかりのなみたや露ならんけさはうつろふし賀の花そ

の(621)

019 春をへてむらさきくるたもとよりまつに心をかくる藤なみ(622)

020 はるのこしあふ坂山やけふはまたかへる空にはしら川のせき(623)

校異 はるのこし 春のこえし

校異 あふ坂山やけふは あふ坂山はけふや

夏十五首

021 はるのきぬなみたなからやぬきかへておしみけるとも人にしられ

ん(624)

校異 はるのきぬ 春のきぬを

校異 おしみける をしみけり

022 玉川や卯花さかりこすなみのおりこのもしきこのわたりかな(625)

023 千夜にこそかたらはすとも郭公しのたのもりの一声もかな(626)

校異 千夜 千々

024 けふといへはのきにあやめやうつるらんあらはれはたるぬまのい

はかき(627)

校異 あらはれはたる あらはれわたる

025 しのふ草はらはぬのきのあやめこそけふのしるしもしとるなりけ

れ(628)

026 ともしするほくしのかけにくれは鳥あやしとしかのおもはさるら

ん(629)

027 さみたれにふしのなるさは波こえてをとや煙にたちまさるらん(630)

028 五月雨の雲ぬのゝきのほとゝきすあめにさはりて声のおちくる(631)

校異 雲ぬの 雲まく

校異 さはりて かはりて

校異 おちくる もりくる

029 さとさそふ花たち花の夕かせに山ほとゝきすこゑかほるなり(632)

校異 さと まと

030 夏のよのつきにすまぬ人そなきねぬに明ぬるこれよりしる(633)

校異 明ぬる あくとも

031 かやり火をたてゝそ人にしられぬるもりのあなたのさとの一むら(634)

032 我やとの庭のしけみのほたるこそ秋のすゑにはなる心ちすれ(635)

校異 秋のすゑにはなる 秋の草葉になる

校異 心ちすれ 心ちする

033 ひむろ田のいなはのすゑの夕かせに夏と秋とを吹みたりする(636)

校異 する ぬる

034 水むすふたもにかよふ松かせをなかくらすは秋のひとこゑ(637)

校異 なかくらすは なかくらすは

035 ふけにけり川をすゝしくなかわれはみそきのなみに秋風そふく(638)

校異 川を 川辺

秋二十首

036 うへてけりまかきの菊のゆふまくれまつしもしるき秋の初かせ(639)

校異 菊 おき

037 さをしかの夏のゝ草をわけすてゝみやまの秋にうつる初こゑ(640)

校異 みやま 太山

038 七夕のこゝろやこよひはれぬらんくもこそなければしあひの空(641)

039 ゆふまくれきくも色ある心ちしてしかのこゑにもはきか花すり(642)

040 秋をへてあはれも露もふか草のさとゝふものはうつらなりけり(643)

041 くもりなきかけをみるこそうれしければこやの山のあきのよのつ

き(646)

042 山のはのつきやしるらん君が代の千とせの秋のいくめぐりこん(645)

校異 めくりこん めくりとも

043 あらし吹すそのゝ秋のやとりかなはれぬるきりにのこるつきかけ(646)

校異 やとり かきり

044 かせさゆるきよみかせきの秋のよはなみこそ月のひかりなりけれ(647)

045 やまさとのかとたにかよふいなつまにしはしくさむゆふやみの

空(648)

046 衣うつをとば枕にすかはらやふしみのゆめをいくよのこして(649)

校異 のこして のこしつ

047 うつゝにはなみたのかすをおもひてにゆめのまくらにしきのはね

かき(650)

048 いくへともかきらさりけり君か代のうつろふ色を冬の花にて(651)

校異 おもひてに おもひにて

- 049 校異 いくへ いくよ
 校異 うつろふ色を冬の花にて 秋をかきぬるしら菊の花
 もみちする秋のあさ霧たつた山よそにそめけむ色なくしそ (653)
 校異 よそに 夜はに
- 050 紅葉はの梢にかよふまつかせはをとほかりするしくれなりけり (654)
 校異 する ふる
- 051 くれの秋の梢に月はかたふきてあらしにまよふ有明の空 (655)
 校異 くれの秋の くれの秋
- 052 きかしたゝなかつきのよの有明はしかとむしとのおしむ別を (656)
 校異 有明は 有明に
- 053 きりくすよもきの霜に思ひ出よ枕のしたの霜になれにき (657)
 054 あきはけふにしきをきてやかへるらんくれ行空に紅葉ちるなり (658)
 055 秋にまた吹かはりぬるかせのをともなをしもかれのおきのうはゝ
 に (659)
- 056 たかさこのおのへの紅葉散にけり外山のあらしをとのさひしき (660)
 校異 さひしき さやけき
- 057 神無月しくるゝ夜半のまきのやはをとこそやかて涙なりけれ (661)
 058 うすくこきまきの梢はちりはてゝ色なきかせも身にはしみけり (662)
 校異 まき 秋
- 059 紅葉はのなこりをしのふふる郷にしくれをはらふ庭の松かせ (663)
 060 ちりはてゝ木の葉かくれもなかりけりのこるあらしにやとる月か
 け (664)
- 061 けさの雪になさけなき名やのこるらんあとをおしみて人をとはず
 は (665)
- 062 校異 のこるらん のこしてん
 花のころ月の秋こそ恋しけれ雪に人こぬ冬のやまさと (666)
 校異 ころ 春
- 063 ゆきの中にしはおりくふる夕煙さひしき色そ空にみえぬる (667)
 校異 色そ 色の
- 064 よさの浦まつかせさそふさよ千鳥なみより外に袖ぬらせとや (668)
 065 こやの池のこほりのうへにこほりして月にすむなるをしのこゑか
 な (669)
 066 あはれなるかりはのをのゝとたちかなおもへはこれやつみのかよ
 うち (670)
- 067 となふなる三世の佛の夜はなれはをのれもなのる雲のうへかな (671)
 068 みにとまるとしをまつこそをしみけれ春と秋とのくれしならひに (672)
 校異 としをまつ 年をさゝ
- 069 あまつかせおくれはかへるとしなれはいそちの袖をぬらしつるか
 な (673)
 校異 としなれは としなみに
 恋十首
- 070 いかてわれいのるしるしをあらはさんみわのやしるを杉の梢に (674)
 校異 われ わか
- 071 校異 やしろを やしろの
 我恋は松をしくれのそめかねてまくすかはらにかせさわくなり (675)
- 072 君ゆへは月もななめつ有明のそらたのめさへなをそうれしき (676)
 073 おもひきや恋すてふ名はたかせにさしもなきさになみかけんとは (677)
 校異 たかせに たかせ舟
- 074 いとゝしくわれに恨そかさねつるたれまつしまのあまのもしほ火 (678)
 校異 われに 我は
- 075 いたつらになき名はかりはたつた河わたらぬ袖をいくよぬらしつ (679)
 076 むかしこそ月やあらぬとななめけれ春さへくれぬ我もとのみは (680)
 校異 ななめけれ ななむなれ
- 077 校異 我もとのみは わかもとの身に
 たれかまつけさ道しはをわけつらんもとをくつゆも人の涙か (681)
 校異 わけつらん 分つらん
- 078 あかてのみさゝわくるあきの恋衣ぬれてほすへき契なりけり (682)
 校異 あきの あさの

- 079 すみそめの袖をはいかにしほるそととかむる人のなきそかなしき (683)
 羈旅五首
 080 ふる郷にとめし心にはなれきてみはかりそめの草まくらかな (684)
 081 宮こいてよくよあかしの浦ならんくもらぬ月そひかすなりける (685)
 校異 月そ 月も
 082 鳥もかなみやこはるかにすみた河とはや人のよはのねさめを (686)
 083 月かけを袖にかけてもみつるかな須磨のうきねの有明のなみ (687)
 084 さとり行まことのみちに入ぬれはこひしかるへきふる郷もなし (688)
 山家
 085 山さとよいそく心はさよふけてたのむまかきに松むしのこゑ (689)
 校異 まかき かきね
 086 おもひいつる都のともなきそき月をまつかせひとりなかめて (690)
 087 山里にあからさなまる宮こ人さひしとやみるすみうからぬを (691)
 校異 みる 思ふ
 088 みやまへの哀やそらにうつるらんまきの梢にあり明のつき (692)
 089 いつかわれみ山の里はさひしきにあるしとなりて人にとはれん (693)
 鳥
 090 ちとせまでつもれるとしのしるしとて雪をかさぬるつるのけ衣 (694)
 091 あくるをそをのかはらゑに人はしるゆふつけとりはいかにいふら
 む (695)
 校異 とりは 鳥と
 092 ことにわれ一こはなしてかふぬるをぬかつくことは君をいのりて (696)
 校異 われ わか
 093 校異 はなしてかふぬるを はなれてかふぬかの
 わか國はみのりのみちにひろければとりもとなふる佛法僧かな (697)
 校異 みちに 道の
 094 いかにしてはとぶくつらにかかるまで君につかへてこの世くらさ
 ん (698)
 校異 はとぶくつらに はとてぬつえに

- 095 祝
 神かせやみそそ川によるなみのかすかきりなき君か御代かな (699)
 096 君か代のかすはいくらといわしみつすむへきすゑは神もしるらん (700)
 校異 いくらと いくよと
 校異 神も 神そ
 097 はるくときみかちとせをみかさ山さしてのとけき雨の下かな (701)
 098 かねてうへてとしもつもりの松なれはおひそふすゑもなをそ春け
 き (702)
 099 やはらくるひよしのかけをたのむ哉のとかにてらせ君かちとせを (703)
 ○静空
 入道左大臣
 静空
 春廿首
 001 あらたまのとしの緒なかき君かためつきせぬ春のはしめなりけり (1804)
 002 君かためしめしいたるわか水をくみてそちよのはしめをはしる (1805)
 003 引かへてのとけきものはかすみしくはるのみそらのけしき成けり (1806)
 004 きみかよにあへるはときをわかねとも春のひかけそさしてうれし
 き (1807)
 校異 ひかけ 光
 005 つねよりもめつらしきかな鶯のまたしとろなるあけほの空 (1808)
 校異 空 こゑ
 006 よそにてもなくそうれしき位山たかきにうつるうくひすのこゑ (1809)
 校異 なく 聞く
 007 有明の月にこつたふうくひすはいろなきこゑも身にそしみける (1810)
 校異 うくひすは うくひすの
 校異 身にそ 身かは
 008 ぬししらぬやとをわかす梅の花にほひになる心なりけり (1811)
 009 はるのよのおほる月よにほひきてそてなつかしきむめ〇下かせ (1812)

- 010 校異 にほひ かほり
はるのひのひかけにめくむ青柳のまゆひらけぬる身にもあるかな (1813)
- 011 校異 ひかけ 光
玉やなき池のかゝみにまゆかきてうちたれかみをけつる春かせ (1814)
- 012 校異 なくらん 鳴なり
のへの草またあさしとやかた岡のをさゝかくまにきしくらん (1815)
- 013 もろともにもみるとはなきを春ことにはなゆへなるゝしかの山人 (1816)
- 014 よしの山たかねをこむる明方に霞にくもる花のしら雪 (1817)
- 015 校異 明方に 明ほのゝ
校異 くもる つもる
山さくら□□□□□□□□うつり香をちらさて袖につゝみつるかな (1818)
- 016 山かせに花いかならんとおもふよはゆめもうつゝのころなりけり (1819)
- 017 やま入のころさくらのしるへせといつれの谷のしつえとかみる (1820)
- 018 校異 しつえとかみる 下枝なるらむ
われのみとなくかはつかな山ふきのうつろひゆくはたれかおものはぬ (1821)
- 019 このもとに花はかはらすつもれともあすをははるとおもふへきかは (1822)
- 020 校異 つもれ つもる
うくひすはかせにちりをはらひてやたにのふるすにこよひねぬらん (1823)
- 夏十五首
- 021 もろ人の衣のそてをひきかへてひとへにみゆるしらかさねかな (1824)
- 022 校異 そて すそ
あし引の山井にすれるころもとや卯の花かけにひかけさすらん (1825)
- 023 校異 山井 山あゐ
校異 花かけに 花かさね
老かよのおもひいてかとほとゝきすつゝめにほとへぬきよのひとこ

- 024 校異 おもひいてかと 思いてかな
校異 つゝめに まつに
校異 ひとこゑ はつ声
まつ程のころもくるしほとゝきすいかておもひのほかにきかまし (1827)
- 025 ほとゝきすゆめにもなくやとおもへともきかぬかきはねられさりけれ (1828)
- 026 校異 ねられさりけれ ねられさりけり
かせかほる花たちはなにほとゝきすこゑなつかしきゆふまくれかな (1829)
- 027 かつしきのさよの枕にかよふなりあやめにかほる軒の下風 (1830)
- 028 五月雨にをとするのきのしつくこそをとせぬよりもさひしかりけれ (1831)
- 029 雲のなみたちそかさなるさみたれにあまの川もや水まさるらん (1832)
- 030 いけ水にしまぬはちすの花よりもきよき心をいかてすまさむ (1833)
- 031 こゝのしなおもひよそへていろくのはちすのうへにころをそやる (1834)
- 032 なつのももそら行月のきよければこほりをむすふ山の井の水 (1835)
- 033 校異 よも 夜の
校異 月の 月し
夕たちのはるゝ雲まにいつるひの光をみかくあさちふの露 (1836)
- 034 校異 光を 光に
久方のあまのかく山くもるかとみゆるははるゝゆふたちの空 (1837)
- 035 校異 あまのかく山 あまのかこ山
校異 みゆるは 見ゆれは
まと井して夕すゝみする松かけはこすゑのかせに秋そさきたつ (1838)
- 秋廿首
- 036 とはすとも秋きにけりとしりぬへしきのふにかはるかせのけしき

に (1839)

たきものを雲のころもにかほはせてたなはたつめやくれをまつら
ん (1840)

校異 たなはたつめや 七夕つめの

七夕をおもひやるこそくるしけれまたむつことも有明のうら (1841)

校異 うら 空

つゆしけきはらをわけてすみそめの袖にもかはす萩か花すり (1842)

秋はきの露にめくみをあらはして春たつやとのうちに向へけり (1843)

校異 やと かと

かりかねのかきつらねたる玉つさはあさみとりなるそらいろのか
み (1844)

ゆふされはにはのゝかせにまくすはらうらかなしかるさをしかの
こゑ (1845)

校異 には 秋

山おろしにしかのねたかくきこゆなりおのへの月にさよやふけぬ
る (1846)

校異 うは葉の 上はに

むらさめにおきのうは葉の玉ちりて月のいさよふたくれのそら (1847)

校異 うは葉の 上はに

さきにほふちくさの花をくつゆやつきにくたくるころとはな
る (1848)

まつほとは山の高かねにあくかれてころろしつめて有明の月 (1849)

校異 あくかれて あくかるゝ

校異 しつめて しつめよ

はつしくれ空にもまつそおもひやるつねにすむなる山の葉の月 (1850)

校異 はつしくれ はれくもる

さらしなやをはすてやまの月はみしおもひやるたになみたおちけ
り (1851)

校異 をはすてやまの をはすて山に

きてみれはうつらなくのとなりにけりすみあらししてし深草の露 (1852)

校異 露 里

ゆふされはわか身ひとつのためなれやあはれに秋のならひなれと
も (1853)

校異 あはれに あはれは

霧こめてちくさの花はみえねともいるあるのへの夕まくれかな (1854)

時雨する外山がすそのうすもみちいまいくしほかそめむとすらん (1855)

たつた山梢の空をなかわれはもみちそかせのすかたなりける (1856)

けふのみと秋をおもはぬくれにたにきくことやすきかねのをとか
な (1857)

校異 をとかな 音かは

よもすからおしむたもとにをくつゆのかはりて秋のかたみなるへ
き (1858)

校異 つゆの 露や

冬十五首

けさみれははたれ霜ふり庭もせこの葉がうへに冬はきにけり (1859)

すきていぬる秋をや空もおしむらんやまかきくもりうちしくれ
つゝ (1860)

まきのやにしくれの音のかはるかなもみちやふかくちりつもるら
ん (1861)

さよふかきまかきの竹の下おれにふりつむ雪のほとそきこゆる (1862)

さえわたる月のくまなくみゆるかなおはすて山のありあけの雪 (1863)

しろたへの雪にこすゑはうつもれてうらみとりなる松のむらたち (1864)

みくまのゝ浦のはまゆふうつもれぬいくか雪もふりかさぬらん (1865)

ゆきそゝく花のこすゑのかり衣打はらへともこゝりかへりて (1866)

校異 こゝりかへりて むちかへりつゝ

うはけさへしらふのたかとみゆるかなはらひもあへすみかりのゝ
ゆき (1867)

校異 たかと 鷹に

校異 はらひもあへす はらひもあへぬ

- 065 すみかまにのほる煙のたえく心に心ほそきはおほはらのさと (1868)
 校異 すみかまに すみかまの
- 066 ましはたく煙もたえぬしつをやとたるひにつたふ雪の下みつ (1869)
 校異 しつをやと しつのは
- 067 はりまかたすまの浦かせ月さえてちとりともよふあけ方の空 (1872)
 秋とのみ名たかきそらの月なれとふゆにひかりはさえまさりけり (1870)
- 068 校異 秋とのみ名たかきそらの 秋との空に名たかき
 校異 ふゆに 冬そ
- 069 校異 さえまさりけり さえまさりける
 月かけをこほりとみれとみつ鳥のうきねのとはかはらざりけり (1871)
 校異 月かけをこほりとみれと さえわたる月の氷は
 校異 とこは 床も
- 070 いそかれぬとしのくれこそあはれなれむかしはよそにきし春か
 は (1873)
 恋十首
- 071 おもひたつころに身をそまかせつるすゑをもしらぬ恋ちなれと
 も (1874)
- 072 人しれぬなけきにもゆるおもひかな心のうちにいかにけさまし (1875)
 校異 いかにか いかて
 校異 けさまし けたまし
- 073 なにかそのころの外にしほりせむたちかへるへき恋ちならねは (1876)
 おもひわひうき世の中をそむきなは人のつらさやうれしがるよし (1877)
 ひたふるにうらみつるかな恋そめしころのとかを人におほせて (1878)
 みそきするしはなくて人ころうきものとのみみこもりのか
 み (1879)
- 077 としふれとあはぬなけきはときはにてなみたそもろきこの葉とは
 なる (1880)
 校異 この葉とはなる 木葉とはなる
- 078 みのうさも人のつらさもおほえけりこひしきにのみぬる袖かな (1881)

- 079 校異 袖かな 袖かは
 みをつまはおもひしらすもなからまし人はうらみにならざりけ
 り (1882)
- 080 よとよにもしほるたもとやあふことのなき名をたにもたてぬれ
 衣 (1883)
 校異 たてぬ たぬ
- 081 羈旅五首
 はるといへはつれていくの人ことにおなしかすみの衣をそきる (1884)
 ゆきなつむこまにくさかへわれもまた木のしたかけにしはしやす
 まん (1885)
- 083 旅ころもかたしくのへのしかのねにこよひもくさのまくらをそす
 る (1886)
 校異 しか 虫
- 084 校異 まくらをそする 枕をそかる
 ふくきするきそのかさまに雪しみてはらへとのひぬまくらての袖 (1887)
 校異 ふくき たひね
- 085 校異 雪風
 校異 まくらての まくりての
 しほたるあまのともにてあかすかな玉もかりしくいとまや
 に (1888)
 校異 あまの あまと
 校異 かりしく かりしき
- 086 山家
 今はとてふるすにかへるうくひすよみやこのはるのものかたりせ
 よ (1889)
- 087 いはまもるかた山かけのさなれ水せかねとやとのうちにこそすめ (1890)
 おのへより松のこすゑにそなれきて門田のいなはかせそよくなり (1891)
 をかやふくやとにはしらぬ初時雨よその木の葉を袖ぬらしける (1892)
- 089 校異 しらぬ しらす

- 090 しはの戸を立いて、みればかた岡のならばかくれましらなくなり(1893)
鳥五首
- 091 もろともに君かちとせをまつかえにすたちはしむるつるのひなとり(1894)
- 092 ともすゝめひきみておりぬ山城のとはのたつらのをちほひろふと(1895)
校異 たつらの 田つらに
- 093 あふさかやせきもる神にあげぬとやゆふつけとりのあかつきのこゑ(1896)
- 094 ゆくとくといかなるさとにいそくらんかりたにおるゝいなおほせとり(1897)
- 095 あらいそのさきいつるいはにゐるみさこたへすや浪の花をみるかな(1898)
校異 さきいつる さきつる
校異 みるかな みるらん
- 祝五首
- 096 あまてらす神の光をさしそへて君か御かけをますかゝみかな(1899)
校異 光を 光は
- 097 きみかへんいま行末のあめつちのひらけはしめてけふになる程(1900)
校異 行末の 行末も
- 098 万代のこゑしるきなりおとこ山ねさす二葉の松のしつねに(1901)
校異 しるき しきる
- 099 うこきなぎときはのきはの君なればちよもやち代もかきりさりけり(1902)
校異 かきりさりけり かぎりさりけり
- 100 いろかへぬ松にさく花いくかへり君かかさしにおらんとすらん(1903)

(注)

- (1) 和歌文学会第六三回大会(二〇一七年一〇月二三日)における発表で、山崎氏が、本資料を踏まえた新たな『正治初度百首』の伝本系統を示されている。(題目:「正治初度百首」再考―新出「射山百首和詠」(林原美術館蔵)より―)
- (2) 式子内親王歌についてはすでに原氏により翻刻が為されている。「池田光政ほか筆『射山百首和詠』(林原美術館蔵)について」『山陰研究』九号、二〇一六年十二月)
- (3) 前掲注(2)
- (4) 資料巻頭に置かれている作者目録とは順が異なる。
- (5) 山崎桂子『正治百首の研究』(勉誠出版、二〇〇〇年)
- (6) このような目移りは親本自体にすでにあったものかとも考えられる。

〔付記〕本稿を執筆するにあたり、資料使用の許可をいただきました林原美術館に感謝申し上げます。また様々にご教示いただいた原豊二氏、山崎桂子氏にも御礼申し上げます。